

「健康と腎臓病に関する一般意識調査」

健康診断などで尿タンパクに異常があっても、再検査に行く人は半数

再検査を受けない理由は「大した異常だとは思わない」が最も多く、
腎臓病に対する意識の低さが浮き彫りに

日本慢性腎臓病対策協議会(略称:J-CKDI、事務局:東京都文京区、理事長:菱田明)は、本年の「世界腎臓デー」にあたって、慢性腎臓病(CKD)疾患啓発の一環として、「健康と腎臓病に関する一般意識調査」を公表します。2007年3月8日「世界腎臓デー」は腎臓病の早期発見と治療の重要性を啓発する国際的な取り組みです。

慢性腎臓病(CKD:Chronic Kidney Disease)は慢性疾患のひとつで、腎障害の存在が明らか、または慢性的に腎臓機能が低下した状態を指します。近年の透析(末期腎不全)導入患者の増加を受け、末期腎不全だけに焦点をあてるのではなく、軽度の腎障害の段階から透析や移植を必要とする段階までを広く包含した概念として捉えなおし、持続的で有効な対策を講じようと提唱された、比較的新しい疾患概念です。

今回の調査は、健康と腎臓病に対する一般の方々1000名の意識を調査することによって、慢性腎臓病(CKD)の早期発見と予防を広く啓発する目的で行われました。

得られた主要な結果は以下の通りです。

- 過去に健診や人間ドッグなどで尿タンパクに異常があった人は全体の約3割(28.8%)
- 尿タンパクに異常があった人で、再検査を受けた人は全体の約半数(51.4%)
 - 再検査を受けなかった人は40.6% その時々で受けたり受けなかった人が8.0%
- 再検査を受けなかった理由で最も多いものは「大した異常だと思わない」(48.6%)

今回の意識調査によって、尿タンパクの異常があっても40.6%の人が再検査を受けず、「その時々によって受けたり受けなかったりする人」を含めれば、約半数の人が再検査を受けないことがあり、再検査を受ける方の数とほぼ拮抗することが明らかになりました。

また、再検査を受けない理由の1位は「大した異常だと思わない」であり、再検査を受けない理由の約半数(48.6%)を占めています。このことは、一般の人々の、腎臓の病気に対する意識の低さをあらわしているものと考えられます。

なお、本アンケートにおける尿タンパク異常の割合が高い理由として、アンケートに協力していただいた皆様が、比較的腎臓病に興味を持っておられたのではないかと考察しています。

一方、日本腎臓学会慢性腎臓病対策委員会：疫学調査ワーキングのデータ(平成 18 年)によれば、タンパク尿がある人は無い人に比較して、腎機能がおよそ 2 倍以上のスピードで低下することが明らかになっています。すなわち、タンパク尿は、腎機能低下率と有意に関係しており、慢性腎臓病(CKD)における腎機能障害の重要な指標とされています。

慢性腎臓病(CKD)の恐ろしさの一つに、初期段階においてはほとんど自覚症状が見られず、発見された時には相当程度重篤化しているケースが多いことが挙げられます。比較的簡単に腎臓機能の状態を知ることができる尿タンパクの検査は、慢性腎臓病(CKD)の早期発見と、それに伴う適切な治療のために欠かせません。

今回の調査結果は、一般社会の腎臓病に対する意識の低さを浮き彫りにするものでした。

日本慢性腎臓病対策協議会は、慢性腎臓病(CKD)とその早期発見、治療の重要性を啓発するため、より一層、着実に活動して参ります。

健康と腎臓病に関する一般意識調査

■ 調査概要 ■

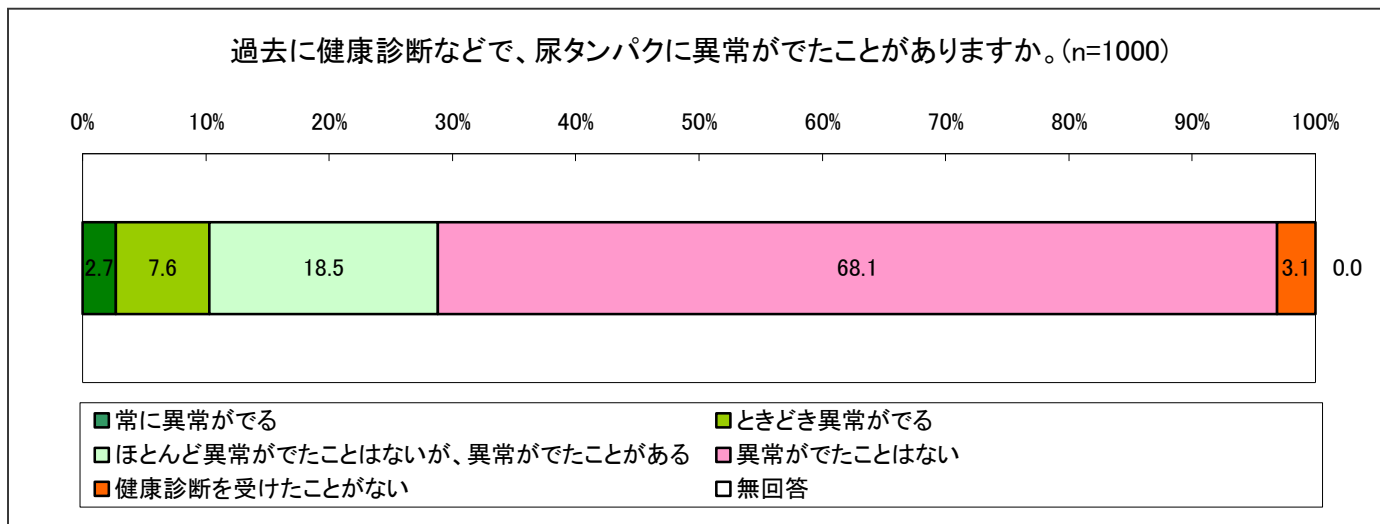
- 目的： 一般の方々の健康への意識と腎臓病に関する理解を広く調査し、慢性腎臓病(CKD)の疾患啓発を行うため
- 対象： 日本国内在住の 20 歳以上の男女 合計1000名
(20-29 歳代、30-39 歳代、40-49 歳代、50-59 歳代、60 歳代以上、各年代 200 人ずつ)
- 方法： インターネット調査
- 地域： 全国
- 時期： 2007 年 2 月 10 日～2 月 12 日

<日本慢性腎臓病対策協議会(J-CKDI)について>

慢性腎臓病(CKD)は国民の健康保持にとって重大な脅威となっているにも関わらず、まだまだ社会的な認知度は低く、又、医療者の中でも十分その対策の重要性が認識されているとは言えません。そこで日本腎臓学会、日本透析医学会、日本小児腎臓病学会の腎臓関連3団体は、慢性腎臓病(CKD)対策の重要性を社会に広く広報し、慢性腎臓病(CKD)対策が国民的な規模で推進されるよう働きかける目的で、2006 年 6 月 25 日に日本慢性腎臓病対策協議会(J-CKDI)を立ち上げました。この協議会は、今後、慢性腎臓病(CKD)とその合併症の克服のために、関連するあらゆる組織(学術団体、行政、市民、患者、など)と協力しながら、啓発活動を展開してゆく予定です。

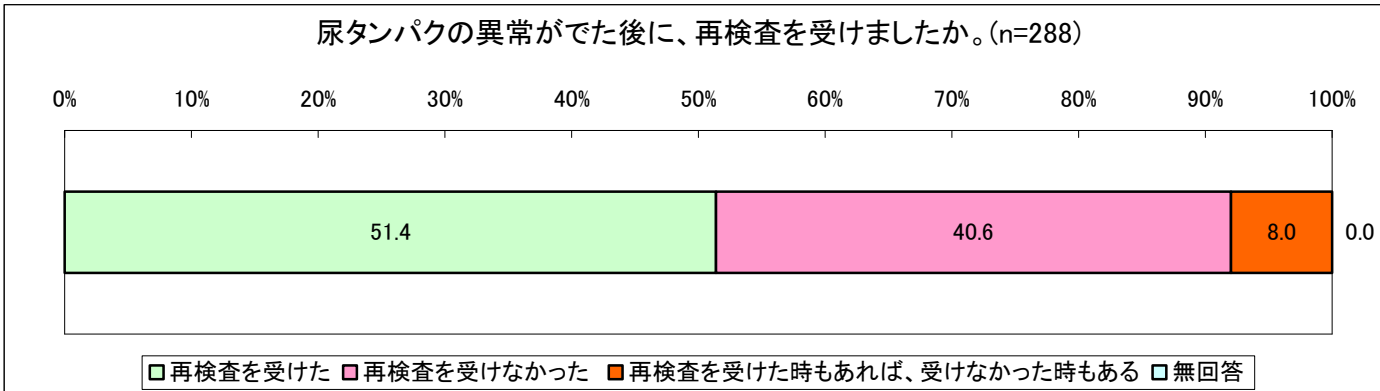
<健康診断や人間ドッグで尿タンパクに異常があった人は全体の約3割>

調査対象者全員に健康診断などで尿タンパクに異常が出たことのある方を尋ねたところ、全体の約3割(28.8%)の方が過去に尿タンパクの異常が出たことがあると答えました。



<尿タンパクに異常があった人の中で、再検査を受けた人は全体の半数のみ>

上の問いで尿タンパクの異常があった方に、再検査を受診したかどうかを尋ねたところ、全体の約半数(51.4%)が再検査を受け、4割(40.6%)が再検査を受けず、その時々によって受けたり受けなかったりする方が8%いました。



<再検査を受けない最も多い理由は「大した異常だと思わない」>

再検査を受けなかった方に、その理由を尋ねました。約半数(48.6%)が、尿タンパクの異常を「大した異常だと思わない」ことが明らかになりました。

